



農作物といっしょに「こころ」も育てる農業を。

トマップファーム
高橋 ひかりさん
仁木町



酪農への熱い思いが込められた牧場看板やTシャツ。牛舎での作業は手際よく、動きが軽やかで、心から楽しんでいる様子が伝わってきました。



心は熱く、頭は冷静に酪農の楽しさを全身で伝える

2012年には、農業女子会(SAKURA会)をスタートし、女性同士のつながりを築いた。「自分の経験を通して、農業女性ならではの悩みや課題を共有したり、情報交換の場が必要だと思いました」。さらに地元イベントにも関わり、地域との結びつきも深めていった。

現在の土地や建物を取得して牧場を移転したのは2017年。現在、牛は110頭まで増えている。「この仕事の中で搾乳作業が一番好き。牛の健康状態をすぐ身近で感じられる時間だから」。酪農の仕事は多岐にわたる。牛の餌となる草づくり、良い草のための土づくり、そして健康な牛づくり、この全てがリンクして、良い生乳を搾ることができるのだ。

「女性が、と強調されるのがあまり好きではない。男性より力がなければ工夫をすればいいし、私はそれを牛たちから教えてもらっています」。これが経営方針にもつながっている。牧草などの畑作業は*コントラクターを活用、牛の餌の供給はTMRセンターを利用、子牛などの育成牛は預託など外部委託している。人の力を借りることによって、搾乳に特化した経営形態を維持している。だから牛舎での作業は、ほとんど角倉さん一人で行なっているそうだ。

「今の限られた環境の中で、牛に



とつても、そして自分にとつても快適な環境づくりをしています。酪農の魅力は、忙しい中でも自分の時間の融通がきくことですね」

その言葉通り、活動の広さは圧巻だ。「SAKURA会」のほか、「酪農女性サミット」、「南十勝酪農女性プチサミット」などを開催してきた。さらに酪農をする女性を増やしたい、頑張っている女性たちの活動を紹介したい、と地元FM局でラジオパーソナリティーとして酪農の魅力を発信している。また、北海道農業士として農業の施策や普及活動にも積極的だ。

どこにそんな時間とエネルギーがあるのだろう。労働力を軽減する搾乳ロボットを導入する気はないかと尋ねると「まさか、大好きな搾乳ができないなんて…。おばあちゃんになっても搾乳をしていますよ」と満面の笑みを浮かべた。酪農への情熱、そして常に刺激を求め、角倉さんの視線はますますぐに未来に向かっていった。

幼稚園教諭から農場経営者へ

仁木町にあるトマップファームは、さくらんぼやぶどうの果樹を中心とした約3haの農園だ。代表の高橋ひかりさんは3児の母。生後6カ月、2歳、4歳(取材時)の愛娘たちとともに農園に姿を見せた。トマップファームは2019年、高橋さんが前オーナーから引き継ぐ形で誕生した。しかし高橋さんは、それまで全く農業とは無縁の人生だった。

「長女の妊娠をきっかけに、幼稚園教諭を退職しました。子どもの頃からの夢だった幼稚園教諭をやり切って、次は子育てに専念しようと思っていたんです」

2018年、長女を出産。その後、前オーナーである落井さん夫妻との出会いが訪れる。不動産業を営む高橋さんの父の元に、

落井さん夫妻が相談をしに来たのだ。聞けば、明治中期から100年続く果樹園を、後継者不在のために手放そうか悩んでいるという。農園の歴史や農業への熱い思いを聞いた高橋さんは、何と、その日うちに農園を継ぐことを決意した。「直感でした。夫には『やるね』と一言(笑)。農業を通して、食のありがたみと、自然と触れ合う大切さを伝えられると思いました。幼稚園での仕事も、子育ても、自分の根底にある考え方が農業とつながっているなど感じただけです」

2018年11月に落井さん夫妻と出会い、2カ月後には会社を設立。そして春まだ浅いころには、落井さんから果樹栽培・農業の基礎を教わり、農業経営者としての高橋さんの新たな人生が本格的にスタートした。

History

短大卒業後、小樽市内の幼稚園に2015年
教諭として勤める



長女の誕生をきっかけに幼稚園を退職。この年、果樹農園オーナーの落井さん夫妻と出会う
2018年

次女誕生。コロナ禍で、さくらんぼ狩りの来園者は激減したが、ステイホーム需要が増え、オンラインショップでの販売が好調に
2020年

2019年1月
トマップファームを運営する(株)北海道開拓使を設立。代表取締役役に就任。すぐに剪定などの農作業を始める

2021年
醸造用ぶどうを定植する。2023年の本格的収穫を目指す

2022年7月
三女誕生